

令和7年度教育未来委員会行政視察報告書

教育未来委員会
委員長 阿部 智

【視察日程】 令和7年11月20日（木）

【視察委員】 委員長 阿部 智
副委員長 岡崎 純子
委員 吉川 英二、渡邊 惟大、青山 雅紀、
伊藤 隆広、麻生 紀雄、盛田 眞弓、
宇留間 又衛門

【視察地及び調査事項】

- 1 市立高浜第一小学校
(1) 高浜第一小学校における日本語教育の現状について

- 2 市立高浜中学校
(1) 高浜中学校における日本語教育の現状について

- 3 市立高洲第二保育所
(1) 通訳兼保育補助員について

【視察報告】

1 市立高浜第一小学校

(1) 高浜第一小学校における日本語教育の現状について

調査目的	<p>高浜第一小学校は、全校児童のうち56%が外国にルーツを持ち、36%が日本語指導を必要とする状況にあり、市内でも高い割合となっている。</p> <p>高浜第一小学校における実際の授業風景を視察するとともに、校長や日本語指導教員から現場の声を聞き、今後の取組の参考とする。</p>
視察概要	<p>1 調査項目</p> <p>(1) 高浜第一小学校における日本語教育の現状について（現地視察）</p> <ul style="list-style-type: none">・日本語指導の授業見学  <ul style="list-style-type: none">・校長、教諭、教育委員会からの説明聴取・質疑応答  <p>2 説明者</p> <p>高浜第一小学校 校長 高浜第一小学校 教諭（日本語指導教員） 千葉県教育委員会事務局学校教育部 部長</p>

	<p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□スマートフォンのアプリなどを使って日本語指導をすることはないのか。</p> <p>■日本語指導の教室ではあまり使うことはないが、通常のクラスではポケトークという翻訳機や、ギガタブを使った同時通訳を使うことがある。</p> <p>□各学校に国際理解教育主任が1名配置されていると教育委員会から聞いたが、高浜第一小学校でも1名だけの配置なのか。</p> <p>■1名の配置である。</p> <p>□保護者とのコミュニケーションはどのように行っているのか。</p> <p>■保護者との個人面談を年に2回行っている。また、保護者に伝えなければならないことがあるが、担任の先生では伝えるのが難しい場合、外国人児童生徒指導協力員のネイティブ講師や、図書館指導員がたまたま中国人なので、その方に間に入ってもらったりしてコミュニケーションをとっている。</p> <p>□外国人児童生徒への英語の授業はどのように行っているのか。</p> <p>■小学校の英語は、楽しく、コミュニケーションをとることを目的にしており、例えば場面を設定するなどして、児童が英語を話すということがメインになるように行っている。文法を教えることはしない。</p> <p>□各種学校行事はどのように行っているのか。</p> <p>■学校行事は通常の学校と同じように行っているが、行事の前に、外国人児童生徒に対して内容を説明する時間をとっている。特に、遠足のような日本独自の行事については、言葉だけでなく、絵や写真も用いながら説明している。</p> <p>□外国人児童生徒への授業は先生が独自に作っているのか。</p> <p>■授業に関しては日本語指導者がゼロから作る。国際理解教育推進委員会が考えたカリキュラムなども参考にしている。子供によって教え方が異なるため、その子供に合った教え方を考えて授業を作っている。</p> <p>□日本語指導に特化した先生は市立小学校にどのくらいいるのか。</p> <p>■現状、日本語指導という形で加配されている教員が27名いる。ベテランの先生にリーダーとなってもらい、人材育成を進めることも考えている。</p> <p>□学校全体で一人一人の子供たちに対する共通の認識を持つため、先生同士の情報交換の時間は取っているか。</p> <p>■職員会議が終わった後に、毎回、困ったことや課題について全員で共有しているが、一人一人について個別に共有しているわけではない。なお、今年度から名札を廃止し、教員全員が児童全員を覚えるようにしている。</p>
委員の主な所感	○外国にルーツがある子供が56%、うちほとんどが日本語指導が必要とのことで、その現状に改めて驚かされた。

	<ul style="list-style-type: none"> ○日本語習得レベルによって週1～4回の取り出し指導を行う点、初期指導前期では（多くが保護者からして必要な）すぐに必要なサバイバル言語の習得をさせる点、の2つにおいて、丁寧に寄り添う教育がなされていると感じられた。 ○便利とされる翻訳アプリをあえて用いない指導には、「用いるほど習得が進まない」現実からして、理想モデルを見た気がする。 ○勉強についていられない子は自信喪失に陥るため、どの子もついてこさせるべく尽力する姿を垣間見た。日本人の子でさえ（言葉がわかっていても）勉強での遅れは大人になってからも引きずる劣等感につながるので、ましてや外国ルーツの子供たちに関しては、この学校くらい丁寧に見てあげなければ健全には育たないだろう。 ○一人一人に合わせたマンツーマンの授業を実施しており、教育奨励賞受賞校として先端の取組だと感じた。 ○教員の方々やご本人、保護者の苦勞も大きいと思うが、楽しんで日本語を勉強する様子が印象的だった。一方で、日本人生徒に比べて勉強に遅れが出ることは避けられないことが理解できた。外国人児童が増えれば、スタッフ確保が課題になると改めて実感した。 ○日本語指導が必要な児童の授業風景を視察して、丁寧に教えておられたのを見て、ありがたく思った。マンツーマン授業は心強い。 ○自信を喪失してしまう児童への対応は手厚く、特に勉強についていけない児童への対応は手厚くしてほしい。特に勉強についていけない児童への対応も重要だが、教職員の負担も大きくなり、さまざまな課題がある中、外国人の保護者への日本語習得の機会の場も必要と思った。 ○他の小学校の現状も確認したいが、日本語教職員の増員も必要ではないかと思う。 ○外国人児童に対する日本語指導の現場を視察し、実情を把握できた点は有意義であった。限られた教員数の中で、個々のニーズに合わせ、いかに効率的な指導体制を整えるかが課題である。また、カリキュラム開発や指導ノウハウが属人化しないよう、教員間で共有・体系化する仕組みづくり（体制整備）が急務であると感じた。 ○現場をみて、先生方のノウハウがある教え方に感じた。 ○文化の考えの違いがあったり、子供に日本語基礎から教えたりなど、学校教育が大変だと思う。文化、考え方、風習が違うため、先生も子供と一体となって日本語指導するので、先生が足りないようである。もっと日本語指導者を多く配置するよう、市議会も参考にしたい。 ○課題として挙げられている日本語指導教員の人員不足は、学校の努力だけでは解決しないことを示しているとわかった。 ○「遠足」の行事など、日本の学校であれば当たり前のイベントが想像できない、習慣がない国の児童に、その目的や意味を伝えるのはなかなかのチャレンジなのだとわかった。
--	--

2 市立高浜中学校

(1) 高浜中学校における日本語教育の現状について

調査目的	高浜中学校は、全校生徒のうち32%が外国にルーツを持ち、14%が日本語指導を必要とする状況にあり、市内でも高い割合となっている。 高浜中学校における実際の授業風景を視察するとともに、校長や日本語指導教員から現場の声を聞き、今後の取組の参考とする。
視察概要	1 調査項目 (1) 高浜中学校における日本語教育の現状について（現地視察） ・日本語指導の授業見学  ・校長、教諭、教育委員会からの説明聴取・質疑応答  2 説明者 高浜中学校 校長 高浜中学校 教諭（日本語指導教員） 千葉県教育委員会事務局学校教育部 部長

3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）

- 日本語がわからない保護者が子供から日本語を学ぶということはあるか。
- 子供が家庭で日本語や日本文化のことを話すかどうかは、家庭によって差があると思うが、例えば、日本語がわからない保護者に対して学校から伝えたいことがある場合に、子供を通して保護者に伝えてもらうというケースがある。その際に保護者が子供から日本語や日本文化を学ぶということもあるのではないかと思う。
- 外国にルーツを持つ子供と日本人生徒との間で、国際情勢によるトラブルはないか。
- 高浜中学校では、教育相談のアンケートを毎月実施しており、アンケート結果に応じて面談を行っているが、今のところは、そういったことで困ったという話は子供たちからは出ていない。
- 中学生という多感な時期の生徒に対して、気を付けていることや課題などはあるか。
- 外国にルーツを持つ生徒が、母国語よりも日本語に慣れている場合、親子のコミュニケーションが大変だという声を聞くことがあり、ただでさえ家庭での会話が少なくなりがちな時期なのに、さらに話ができなくなってしまうということにもつながるため、課題と捉えている。また、学校で悩みを相談するにあたり、日本語よりも母国語の方が伝えられることもあるため、外国人児童生徒指導協力員と外国籍の生徒が話す時間は大切である。しかし、外国人児童生徒指導協力員は月2回程度しか在籍していないため、時間の確保が難しい。
- 高浜中学校の日本語指導教員は日本語指導だけを行っているわけではなく、授業も持っているのか。
- 本来は日本語指導だけを行う体制としたいが、現状はそうになっている。そしてしまっている。
- 外国にルーツを持つ生徒の卒業後の進路はどのようになっているか。
- 高校に進学する生徒が多いものの、高校で退学してしまうケースも少なくない。工業関係に進む生徒もいる。
- 転入等の事情により中学生になって初めて日本語指導を受けるというケースもあるのか。
- ほとんどは小学校から日本語指導を受けており、中学生になって初めて日本語指導を受ける生徒は全体の1割弱程度だと思われる。
- 転入してきた生徒について、学力にも差がある場合にはどのように対応しているか。
- 転入してきた際に、母国で何を勉強してきたかということを全教科について聞き取り、確認してから指導に入るようにしている。概念はわかっているが日本語に直せないのか、概念自体を知らないのかについても確認し、生徒それぞれに合ったカリキュラムを組んでいる。

委員の主な所感	<ul style="list-style-type: none"> ○（中学校から転入する生徒もいるようだが）多くは高浜第一小で丁寧な指導を経てきた子供たちとのことであり、指導方法が激変して脱落者を出すことのないよう、シームレスな指導が行われていると理解した。 ○本人が日本でやっていくとの覚悟を決めると、一気に学習スピードが上がるということ、そのモチベーション形成においても、この中学校の教員の方々の影響は大きいのだろう。 ○月1回の教育相談アンケート実施により、早期に問題を把握できる点は意義があると感じた。 ○各科目担当の教員が日本語指導も担うとのことで、教員の方々の激務過労が懸念される。補助スタッフの拡充が必要ではないだろうか。 ○高浜小学校の卒業生は、小学校での日本語教育や日本文化を学習しており、個人別の情報も共有されているため、連携の取組が素晴らしいと思った。 ○生徒は、日本語や日本文化を学ぶ機会が増えているが、保護者が日本語を話せなかったり、日本の文化に理解がないことが課題となっている。また、生活言語と学習言語がリンクしないことも課題であり、毎月、相談アンケートを実施し、課題解決に取り組んでいることがわかった。 ○外国人生徒が小学校と同様に意欲的に学ぶ姿が印象的であった。 ○教員の皆様の人数が限られている中で、専門的な役割に専念できていない状況もわかった。サポート体制を考えていきたいと思う。 ○言語の違いだけでなく、母国での学習の進行度の違いも考慮されると改めて確認できた。様々な苦勞が認識できた。 ○高洲第一小学校と同じで、日本語指導教員によるマンツーマンでの指導もされ、教科担任として普段の授業と掛け持ちの中対応されている現状であることがわかった。負担軽減が必要である。 ○日本語教員の増員の検討も必要かと思う。ただし、質の確保も重要なため、教育未来委員会でもしっかり議論する必要があると思う。 ○日本語指導担当の教員が、教科担任も兼務していた点については、早急に改善すべきである。これは学校現場と教育委員会の間で、現場の状況共有が不足していたことに起因する事象だ。今回の指摘により改善がなされるとのことであり、視察の成果があった。現場に足を運んだからこそ判明した事実であり、視察の重要性を再認識した。 ○小学校と中学校の9年間で日本語を学んで、日本の文化を習って早く日本に慣れてもらいたいと思う。やはり先生が足りないと思う。 ○中学生という多感な年ごろの生徒への指導という点では、学校では日本語、家では母国語という、家庭でのアイデンティティの確立が課題とも話されていたことが印象に残った。カウンセラーと一緒にケアするとのこと。必要であるなら、人員配置も考えるべき。 ○高校への進学も視野に3年間という大事な期間をどう過ごすか。生徒本人が今後日本にいたいのかどうかによって、日本語の学びで差が出るとの話。その生徒の将来にかかわる問題で、勉強面だけでない精神的な支えも問われるのが、中学校での日本語指導なのだ気づかされた。
---------	--

3 市立高洲第二保育所

(1) 通訳兼保育補助員について

調査目的	高洲第二保育所は、全体のうち44%の児童が外国にルーツを持ち、市内でも高い割合となっており、通訳兼保育補助員を配置している。 高洲第二保育所における通訳兼保育補助員による通訳の様子を視察するとともに、所長から現場の声を聞き、今後の取組の参考とする。
視察概要	1 調査項目 (1) 通訳兼保育補助員について ・年長保護者懇談会にて、通訳兼保育補助員が中国語の通訳を行いながら保護者対応を行う様子を見学  ・所長からの説明を聴取  2 説明者 市立高洲第二保育所 所長 こども未来局幼児教育・保育部幼保指導課 課長

	<p>3 主な質疑（□：質疑、■：答弁）</p> <p>□保護者懇談会時にミャンマーと中国の通訳が各1人いたが、人数が多い中国人の保護者に対し1人の通訳で対応できるのか。</p> <p>■外国籍保護者の日本語理解度には個人差があるため、理解度に応じて通訳の座席位置を調整し、質問しやすい雰囲気を作り対応している。</p> <p>□外国籍の保護者はどのような仕事をしているか。</p> <p>■サービス業、中国の方は自営業（飲食店等）が多い。日本語が堪能な方であれば会社勤めの方もいる。</p>
<p>委員の主な所感</p>	<p>○保護者会議では歌・ギターで参加者をリラックスさせつつ、開催から、「welcome」の姿勢、温かい気遣いが存分に感じ取れた。日本語スキルがない保護者が安心して子供を預けるために、通訳は要の立場であり、とはいえ保護者も母国コミュニティで完結する生活を続けていては子の教育上、プラスにはならず、通訳にべったりの保護者を見て、「甘やかし」てはならないと思った。「言葉」と「行動」をセットで教えると伺い、この手法以上に速く習得させるやり方はないと感じられた。恐らく、大人に教える際も、これが最も効率的だろう。幼児を抱える外国人の親から日本に馴染んでもらうには、幼児と同時に親が日本と日本語に慣れるのが自然だと思うので、子を介するコミュニケーションの場としての保育所の活用がとても有効だろうと思う。</p> <p>○実際の保護者会の様子を視察したが、中国語とミャンマー語の通訳が保護者の横にいて、通訳しながらコミュニケーションを図っており、この取組を人的支援によって拡充していかなければならないと思った。</p> <p>○中国語の対応（通訳）は可能だが、多言語の対応まではできていない。言語的な障壁がなくなるよう、コミュニケーション不足とならないような対応も必要であるため、補助員の増員が必要かと思う。</p> <p>○緊急時、災害時の保護者へどのように伝えるか、大きな課題となっている。</p> <p>○幼児教育から日本語に触れられるのは、外国にルーツを持つ子供たちにとって有効。保護者懇談会も楽しそうな内容で大変良かった。</p> <p>○通訳兼保育士の存在価値を深く理解することができた。現状、少数言語への対応は派遣通訳に依存しているが、「今すぐ必要」という緊急時に対応できないという課題がある。派遣に頼るだけでなく、必要なタイミングで即座に対応できるような新たな仕組みについて、研究・検討する必要がある。</p> <p>○千葉市も外国人の割合は高くなっているようである。保護者とのコミュニティが大事だと思う。また子供は言葉がわからないことが多いと思う。先生は状況を客観的に説明し共通認識を持つといいと思う。それにしても言語が話せる先生が少ないように思う。保護者とのコミュニケーションが大事である。</p> <p>○就学前のお子さんに対する（保護者に対する）日本語指導という観点で、保育所の保護者向けの懇談会に参加させていただけたのはとてもよかった。中国語の通訳の方と、ミャンマー語の通訳の方が、外国籍の保護者の中に入って、同時通訳で行っているところの状況も直接見ることができ、貴重な視察となった。子供たち（年長）が小学校に入る前の話し合いの様子を動画で伝える工夫や、担任の保育士さんがギターで生演奏しながら、場の一体感をつくっている努力や工夫には感</p>

	<p>動した。</p> <p>○4、5歳児になると友達関係のいざこざも起きてきて、中国語の通訳のみでは、中国語以外の子供が安心できないなど、コミュニケーションの点で課題があることが分かった。また、けがや災害時の対応は、電話では伝えにくいなど、子供たちの安否を正確に伝えなければならない保育所という場ならではの視点も学べた。</p>
--	---